財団処理欄	4

留学・研究計画書

氏名　加藤　優子	留学機関名　マレーシア国民大学
留学先国名　マレーシア	留学期間　西暦 2004 年 4 月 ～ 2006 年 3 月

研究テーマ（留学目的）

マレーシアにおける出産の社会史：マレー農村の女性と産婆を中心として

研究テーマ（留学目的）の説明

マレーシアにおける出産は、過去50年間にわたって急激に病院化してきた。これはマレー人・華人・インド人の各民族を対象に、植民地時代から実施されてきた保健政策が及ぼした影響が大きい。そこで博士予備論文（修士論文相当）では、首都クアラルンプール近郊に位置するカジャンの国立病院を事例として取り上げ、病院所蔵の過去50年間分の『出産台帳』の分析を通して、国家およびカジャン地域の社会経済的文脈のなかでの、出産をめぐる制度的枠組みと病院出産の変遷についてまとめた。その結果、出産の病院化の過程には、マレー人・華人・インド人の各民族間で異同があったことが明らかになった。すなわち、イギリス植民地時代に労働者としてマレー半島に移住した華人・インド人の多くが比較的早期から病院出産をしていたのに対し、マレー人は、農村の自宅で、伝統的産婆の介助のもとで出産する傾向があった。マレー人の出産が病院化されたのは 1960 年代以降のことで、これには農村に建設された国立クリニックと政府から派遣された助産婦が大きな役割を果たしたことが明らかとなった。

そこで次段階としての本研究では、上述した国家の制度的介入のなかで、農村部における出産が、実際にどのように変化してきたのかを歴史的に考察することを目的とする。考察対象とするのは、カジャン近郊のマレー農村である。具体的には、農村での伝統的産婆の介助による出産から、病院における医師・助産婦のもとでの出産への移行過程において生じた、以下の変容を明らかにする。1）身体的実践としての出産（出産の体位、胎盤の扱いなど）の変化、2）出産をめぐる技術革新（助産技術や道具などの導入・変化）、3）出産に関する「伝統的」慣行や知恵（儀礼やタブーなど、またその意味付け）の変化、4）出産に表れる生命観・身体観・家族観の変化、の4点について、各世代の母親と産婆を対象に聞き取りを行う。そしてこれらを、当時の村の社会経済状況、あるいは保健医療サービスの状況と関連付けて重層的に分析することにより、村側からみた動態的な出産の変容過程を明らかにする。

なお今回の留学先としてマレーシア国民大学を選定したのは、以下の3点の理由による。1）調査地と地理的に近く、公共の交通機関の利用が可能であること。2）2000年7月の予備調査以降の臨地指導教官であるSharifah Zaleha Syed Hassan教授が所属している機関であること。なお同教授は「イスラーム的ジェンダー」の研究者であり、申請者の研究テーマについて適切かつ有益な指導が可能である。3）国立総合大学であるため図書館が充実しており、必要な文献資料が得やすいこと。